

公営墓地の利用意向について —小山市営墓地を事例に—

Study on the use intention of public management graveyard.
Case of the OYAMA municipal management graveyard.

尾立 弘史
Hiroshi ORYU

1、はじめに

近年、墓地が多様化している。墓の形態そのものとともに利用・運営方法にも多様化が見られる。

もともと日本の墓は、土葬の時代は別として、〇〇家という銘のもと、カロート内に複数の骨壺が収納でき、代々伝えていくものが基本であった。

少子化の影響で一人っ子が嫁ぎ（婿養子も含めて）姓が変わり、継承者がいなくなる場合や、子や孫に面倒を掛けたくないとの思い、また、子供の外国など遠方に定住するなどの理由で、継承祭祀の必要のない永代供養墓などの形式の墓を求める、など、家の継承の象徴としての墓が失われつつある。また、結婚時の姓の変更からか夫と妻の実家の銘を記した両家墓の出現、家の継承を重視しない抽象的な墓碑銘（「愛」とか「夢」とか）も多い。

一方墓地不足や購入費の高騰からか、集合墓地、合葬墓、ロッカー式墓地、自動倉庫形式も見られるようになってきているし、さらには、手元供養として卓上アクセサリ化や物理的な墓を否定し、散骨、樹木墓からインターネット内の墓まで出現している。

祭祀の方法も、永代供養墓で管理者にまかせっきりや、「もやい」形式で仲間を募り、先に逝った人を生きている人がみんなで祭祀する方法なども生まれている。

墓に入る人の意識にも変化が見られる。特に女性の場合、「嫁ぎ先の家の墓には入りたくない」、「夫とも別の一人の墓が良い」、「実家の親の墓に入りたい」、「あの姑とは絶対いや」、などの意見も聞かれる。

これらの墓の変化は、「家」「家族」の変化

を如実にあらわしていると見ることができよう。

このような状況の中、小山市営墓園「やすらぎの森」の中期計画の策定に協力する機会を得、その中で、在来の墓地形式のみではなく、今後の墓地需要にあった形式の墓地が模索されている。個人需要に対応するため合葬墓の計画が進められているため、その需要予測や、墓の形態を検討すること、また、同市内ではこの墓地が大規模公営墓地としては唯一となるため、今後長年にわたって維持できるようなシステム作りも課題となった。

2、研究の目的・方法

本研究は、市営墓地のあり方を探る中から、人間の最後の住処とも言える墓のあり方を探ろうとするものであり、それはまた家族の形の投影である墓から今後の家族のあり方の方向を考察しようとするものである。

本報告は、研究の手始めとして、小山市営墓園*1「やすらぎの森」の利用状況を解析し、利用希望がどのような条件に影響されるかを明らかにし、今後の墓地整備の基礎資料を得ようとするものである。

墓地の需要予測は、「大阪方式*2」がよく利用されている。ただ、「大阪方式」は、算出のための係数の多くが住民の意向調査によっているためか地域によってばらつきが大きく、あまり精度がよくない場合があることが知られている。また、墓園の規模算定を複数の都市の比較の中から行うのも有効と考えられるが、墓園そのものの魅力や周辺都市との関連など都市間で比較できない要素も多く傾向が見出しづらい状況にある。

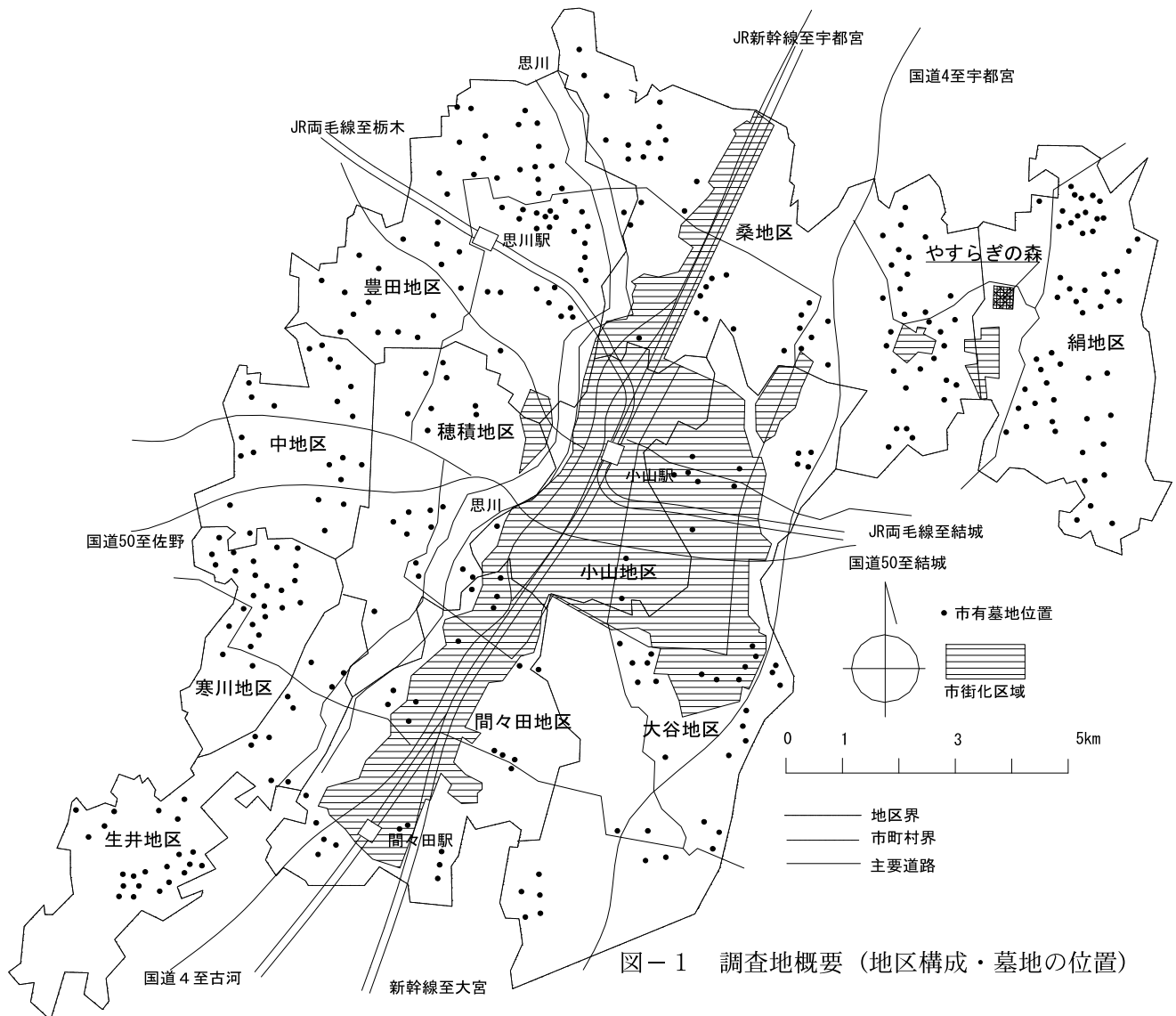


図-1 調査地概要 (地区構成・墓地の位置)

本研究では、市営墓園の使用状況と埋葬状況が墓園設置時から13年間にわたって記録されており、さらに、同一墓園の利用者データが状況の異なる居住地区別に入手できるため、利用者の居住する地区の特性が使用傾向にどのように影響するかを明らかにすることが可能と考える。

3、調査対象地の概況

調査対象地は栃木県小山市で、対象墓園は市営墓園「やすらぎの森」である。小山市は栃木県の南部に位置し、人口約16万でJR線や主要国道が通じ交通の便は良く、人口も増加傾向にある。

小山市内の墓には、「市有墓地*3」「寺社墓地」墓園「やすらぎの森」の3種類がある。本解析は「やすらぎの森」についてであり、「市有墓地」は地区特性として比較対象とするが「寺社墓地」は統計資料等が入手できないため解析からは除外している。

解析-1、市営墓園「やすらぎの森」の使用状況

市営墓園「やすらぎの森」は、市の北部に位置し(図-1参照)、「将来の墓地不足を解消し、低廉な公共墓地を長期的安定的に供給(市基本計画書)」することを目的として1995年に利用開始された。世帯を単位とし、継承者が市内に在住することを条件に分譲される日本の一般的な利用方法の墓地である。

面積	約9.8ha
墓所数	3922基
分譲開始	平成7年10月1日
利用者	市内に1年以上在住で住民登録のある人 1世帯1基とする
形式	一区画4㎡の芝生墓地 塔婆立て、外柵等設置不可
墓石の大きさ	巾×高さ×奥行き 600×600×800以下
カロート	12体収容可能
使用料	永代使用料46100円 年間管理費5250円
申込	有骨者は随時、その他は年一回公募

表-1 墓園「やすらぎの森」の概要



写真-1 墓園の景観

「やすらぎの森」の概要を表-1に、墓園の写真写真を写真-1に、墓園の配置図を図-2に示す。

年次別「やすらぎの森」の使用許可数と納骨数を図-3に示す。使用許可は「有骨申込」（現に焼骨を有し、1年以内に納骨できる）と「一般申込」（焼骨はなく、将来のために先行取得）があり、使用許可と納骨は対応しない。また、墓地にすでに複数の納骨がなされているものもある。

墓地の需要予測は「大阪方式」を参考に「死亡者の25%程度、年間200基程度（市担当課）」と予想されていた。初回（1995年）の公募には希望が殺到することが予想されたため2倍程度の450基を準備したが応募が多く抽選となった。その後2年間は少し落ち着き年間200基程度で推移し、3年目（1997年）からは希望者全員に分譲している。4年目（1998年）からは有骨者は年間を通じて随時受付とした（2004年からは「一般申込」も随時受付）。それ以降年間80基から120基前後で推移している。なお、2005年は公募を行わなかったため2005年度が少なく2006年度が多くなっている。

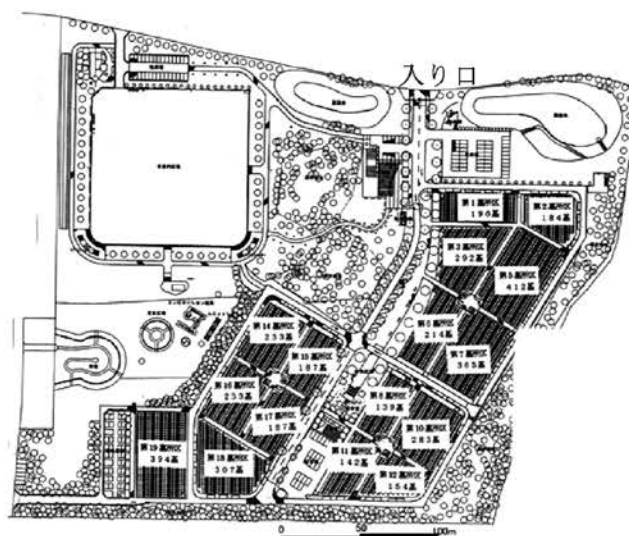


図-2 墓園「やすらぎの森」配置図

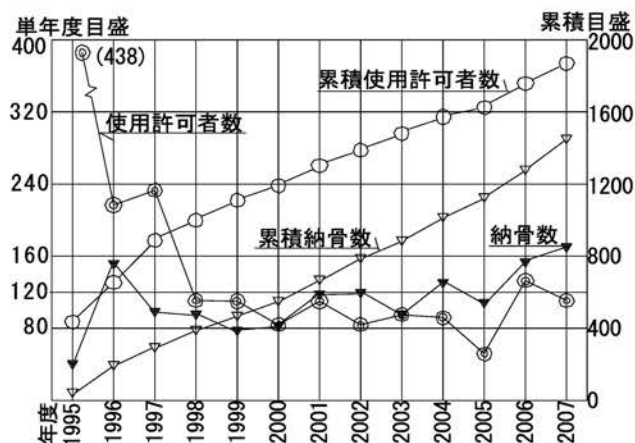


図-3 墓園の使用数の変化

表-2 墓園の景観

地区名	面積 (km ²)	総人口	世帯数	高齢化率 (%)	農家率 (%)	人口増減率 (%)	死亡率 (%)	「市有墓地」			「やすらぎの森」		
								箇所数	総面積 (m ²)	面積/世帯	使用者数	使用者率 (%)	距離 (km)
小山市全体	171.6	162,503	60,030	17.5	7.7	3.2	0.70	464	183551	3.06	1752	2.9	
小山	13.92	51,434	21,537	14.9	0.9	6	0.58	12	3631	0.17	622	2.9	8.1
大谷	30.36	38,966	14,743	13.6	5.0	7.3	0.58	61	30984	2.10	527	3.6	9.3
間々田	18.21	27,013	9,397	19.1	5.9	2.7	0.67	36	13569	1.44	189	2.0	13.2
桑	30.54	20,837	6,799	20.0	9.9	-0.4	0.71	83	35052	5.16	343	5.0	5.1
穂積	12.99	4,783	1,875	24.1	18.6	-2.6	1.08	28	11618	6.20	29	1.5	10.3
豊田	20.91	7,540	2,254	24.3	25.8	-2.4	1.01	27	10100	4.48	26	1.2	14.4
絹	17.27	5,280	1,511	26.8	37.6	-3.3	1.39	71	22216	14.70	15	1.0	1.9
中	8.72	2,727	766	28.9	41.1	-6.3	1.17	32	15753	20.57	0	0.0	13.0
寒川	6.43	1,713	500	27.6	42.5	-7.8	1.25	77	26126	52.25	0	0.0	9.2
生井	12.26	2,210	648	25.6	47.4	-8.3	1.49	37	14502	22.38	1	0.2	16.7

地区の順序は便宜的に農家率の順序である

・人口・世帯数・高齢化率 2007年3月1日推計値

・農家率 2005年農林業センサス

・人口増減率2000年から2005まで 国調

・「市有墓地」:小山市市有墓地設置条例より集計

・死亡率 住民台帳より市役所にて集(2000年から2007までの平均)

・「やすらぎの森」使用者数は世帯数ベースである

・「やすらぎの森」距離:各地区市役所出張所からの直線距離

年間新規使用者数が100前後とすると当初予想の半分程度と、市内の死亡者数が年々増加しているにもかかわらず、予測を大きく下回った。現在検討を進めている「合葬式墓地」への影響が懸念される。後述するが、世帯単位の墓がもうすでに使用希望者のニーズとずれが生じているとも考えられるからである。

納骨数を比較する。募集開始当初は少し変動が大きいですが、その後年間100から120柱前後の納骨で近年やや増加の傾向が見られる。小山市の死亡者数は2000年が1028人2007年が1278人と増加しており、単純に比較すると死亡者の約10%から12%程度と見ることもできる。ただ、後述するように地区により相当差が大きい。

解析一2 地区間比較

小山市は合併以前の旧市町村別に10地区に区分される。地区の位置を図-2に示し、地区の概要を表-2に示す。小山市は中央部を南北にJR、新幹線、国道4号が通り、その周辺に市街地を形成、この市街地近傍を南北に思川が流れる。地区の特徴はこの思川の東西で大きく異なるようである。表-2では便宜的に農家率の順番で並べている。表の上位4地区はいずれも東側中央部で農家率は低い。下位6地区は絹地区を除いてすべて西側にある。なお絹地区は東側ながら市街地から離れた農村地帯に立地する。小山市はこの東側中央部（小山、大谷、間々田、桑）と周辺農村部（中、豊田、絹、穂積、寒川、生井）に区分できるようである。

高齢化率でも20%を境に中央部の地区が低く周辺農村部の地区が高い。同様に死亡率も1%を境に両者で異なる。人口増減率では中央部は横ばいもしくは増加であるのに対して周辺農村部は大きく減少している。「市有墓地」は後述するようにかつての農村集落の共同遺産と見ることができ、分布状況や（図-1参照）世帯当たりの面積も両者で大きく異なるようである。

農家率と「やすらぎの森」の利用者率（100世帯当たりの利用者率）を比較して図-4に示す。農家率が大きくなるに伴い利用率が減少する傾向が顕著である。人口増減率、高齢化率、世帯当たり「市有墓地」面積は、農家率と非常に相関が高く、利用率と同様の逆相関を示す（図略、表-2参照）。ただ、死亡率との間にも逆相関が見られ

るのは、周辺農村部の地区に死亡率が高いが、もともと墓園「やすらぎの森」の使用希望者が少ないためと思われる。

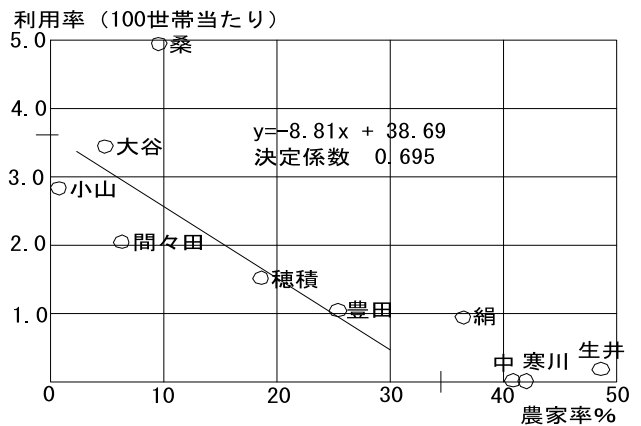


図-4 農家率と利用率

墓園までの距離の影響をみる（図略、表-2参照）中央部の4地区では、桑地区が最も利用率が高く、間々田地区が低い。桑地区は墓園の立地する絹地区に隣接し、かつ墓園は絹地区でも桑地区に近い位置に立地する。間々田地区は市の南端に位置し市中心市街地の反対側となる。物理的な距離以上に遠く感じられると予想される。ただ、それ以外の地区では、絹地区のように自地区内に墓園が立地するのに利用率が低い地区があるように、距離以外の要因がより大きく影響している。

このような地区の状況から、「やすらぎの森」の使用状況を見ると、ほぼこの中央部4地区の利用に限られるようである。地区内で100基以上、且つ利用率（100世帯当たり）2%以上はこの4地区に限られる。

解析一3 年次別地区別比較

前解析から、年次別地区別解析では使用者の多

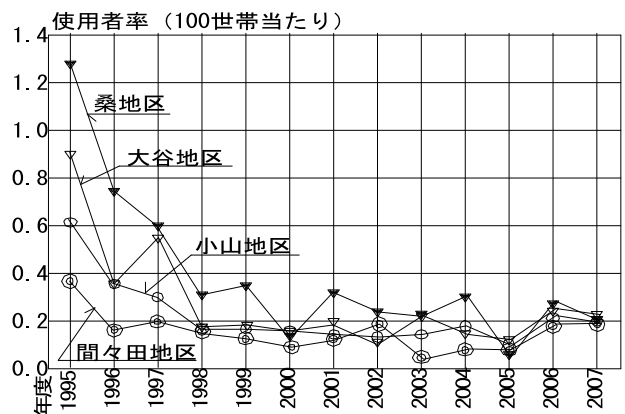


図-5 年次別利用者率

い地区（中央部4地区）に限って解析を進める。年次別使用者率（100世帯当たり）を図-5に示す。募集開始当初は各地区とも多くの応募があったが次第に平均化し、各年度とも100世帯あたり0.18前後であるが桑地区がやや多く間々田地区が少ない。

年次別納骨数（100世帯当たり）を図-6に示す。初年度、2年度は有骨者が納骨可能になるのを待っていたようで3年目から少し落ち着いたようである。全体としては0.1から0.2の間に分布するが近年増加傾向にあり、4地区平均で0.25程度となる。桑地区は年度による変化が大きい。

各地区内の死者数に対する納骨数を図-7に示す。0.1から0.15程度の値を示し、増加傾向にある。間々田地区で2003年2004年で特に低い。死亡者数は他と同程度で納骨数が極端に少ないが原因は明らかでない。なお、各地区別年間死亡者数は2000年以降のみ入手できたのでその期間を比較した。

解析一4 墓園「安らぎの森」使用者の意向

墓園「安らぎの森」使用者に対するアンケート調査が行政により行われたので、今後の墓地のあり方に関する設問を加えた。調査は平成20年7月郵送配布郵送回収で行われ、対象数1874世帯で回収率51.6%（967世帯）であった。すでに墓地を所有している世帯に対して一通の調査票では今後の墓地のあり方の考察にはそれほど説得力は持たないことを承知での調査である。はじめにも述べたように家族が変化している中で個人を対象とした墓地のあり方が問われるからである。

お墓の希望形態（表-3）では、すでに購入した「1、芝生墓地」が最も多いのは当然であるが「2、夫婦二人や個人用の小規模な墓地」「3、合葬式墓地」にも評価があった。

継承する祭祀者がいなくなった場合の措置（表-4）では、「1、その時点で合葬式に移す」「2、一定期間後に移す」という割合が多く、「3、未来永劫に残す」を上回った。

「合葬式墓地」の利用希望（表-5）では、墓園「やすらぎの森」の墓地購入者でありながら「1、利用したい」「2、条件によって」を合計すると45%を越していることは注目に値する。

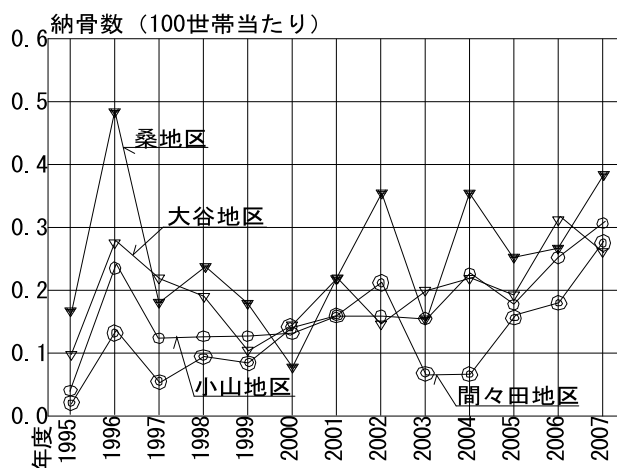


図-6 年次別納骨数

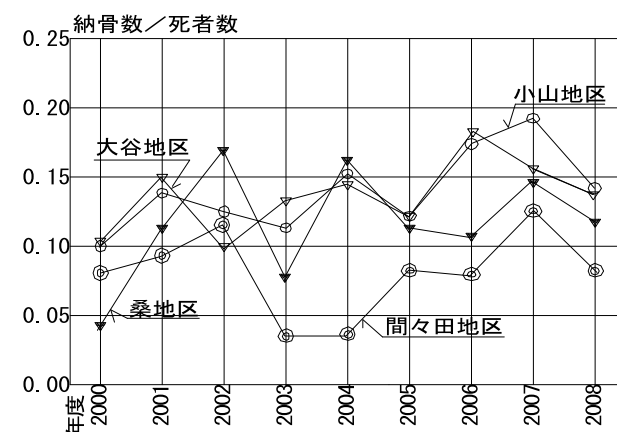


図-7 納骨数と死亡者数

希望形態	構成比
1、芝生墓地	72.0
2、夫婦二人や個人用の小規模な墓地	5.6
3、合葬式墓地	2.9
4、ロッカー式や壁式などの集合墓地	1.0
5、日本式の墓地	2.9
6、その他	0.3

措置	構成比
1、祭祀社居なくなった時点で合葬式墓地に移す	32.8
2、祭祀社居なくなつてから一定期間後に合葬式墓地に移す	29.6
3、祭祀者が居なくなつても未来永劫に残すべきである	19.4
4、前もって合葬式墓地に移す期限を決めておき契約しておく	6.5

意向	構成比
1、利用したい	6.6
2、条件によっては利用したい	39.8
3、利用したくない	43.2

まとめ

①小山市墓園「やすらぎの森」の累積使用世帯率は2.9%であるが地区によって差が大きい。市街地の地区では2%から5%程度となるが周辺農村部では1.5%以下で、ほとんど使用しない地区もある。

②使用世帯率から小山市は2つの区域に区分できる。両者の墓園使用希望の差は、市街地で新規居住者が多い地区と、農村部で先祖代々居住している世帯が多い地区の差であろう。前者は「墓地を所有していない世帯が多い」「芝生墓地のような明るい雰囲気を受け入られる」。後者は、「先祖の墓がある」「寺などとの付き合いが濃密」「昔ながらの和式墓地を好む人が多い」などの特徴が考えられる。指標としては「農家率」「人口増減率」「高齢化率」「市有墓地面積」等が考えられるがデータ数が少なく、定量化できるまで至っていない。

③年間新規利用世帯率は市全体では0.16%程度（約100基）であり、使用率の高い市街地の地区で0.2%程度となる。

④納骨数は、使用率の高い市街地の地区で100世帯当たり年間0.2程度であるがやや増加傾向にある。

⑤小山市墓園「やすらぎの森」を使用している世帯に行ったアンケートではあるが、「個人的」で「未来永劫でなくても」というような変化の兆しを見ることができている。

使用者の中には市担当課に対して「家族用の墓は購入したが、自分ひとり用が購入できないか」という相談もあるようである。今後、増加するであろう高齢単身者や高齢夫婦のみの世帯に対する墓地供給、また、墓に対する個人の価値観の変化に対する墓のあり方を考える必要がある。

注

* 1 「墓園」この種の施設名称には「墓苑」「霊園」「墓地」など様々あるが小山市が使用している正式名称に統一した。

* 2 「大阪方式」世帯数を基に居住地への定住性の傾向や墓地の購入の意志を考慮したうえで、分家した世帯が1世帯につき1墓所を持つことを仮定して算出する手法であり、世帯数、定着志向、死亡者数、死亡発生世帯率、傍系世帯率を基に墓地需要を予測する方式である。

* 3 「市有墓地」は、かつての集落ごとに立地していた共同墓地で、「市有墓地」として登記されたものである。近年大部分が登記されている（2007年現在464箇所）。平均面積は400㎡程度であるが100㎡以下が約2割、1000㎡以上が約1割と面積にばらつきが大きく、利用管理は地元に任されているためか区画数や空き区画数などは不明である。地域によって立地数に差が大きい。「市有墓地」の立地状況を図-2に示す。「市有墓地」を多く有する地区は「やすらぎの森」の使用率が低いが、「市有墓地」の納骨状況などが不明であるので概況を見るにとどめた。

参考資料

- ・小山市墓園やすらぎの森審議会資料
- ・小山市公式ホームページ 統計編

小山工業高等専門学校 建築学科
E-mail : oryu@oyama-ct.ac.jp

「受理年月日 2009年9月15日」